

＜今日の説教のポイント I コリント 10 章 23 節～11 章 1 節＞

キリストの救いを本当に知った者に備わって来る自由さとは。

① 同じ自由さを主張する論敵とのパウロの自由さの違いは？

カッコ付きの「すべてのことが許されている」(23)とは、コリントの教会に現れた信仰者たちの弁です。パウロは彼らを問題にしています。彼らが持っていると主張する自由は、パウロも持っていると言っています(6:12)。では、どのような点が違うのでしょうか？

② 自分の救い(利益)でなく、他人の救いを考えられる自由さ。

私たちは、信仰者が救いのために節制したり善行に励むことは大事、と考えがちです。しかしパウロは、そこで「自分の救い」を考えているならそれは違う、と言っているのです。「私たちの救いはイエス様の十字架の死によって成し遂げられた。だからもう自分の救いについては心配する必要はないのだ。これからは、そのことをまだ知らない人が救われることを祈り、取り組むのだ」、そうパウロは教えているのです！

③ 全てのことを神様に感謝して生きることができる自由さ。

それは言い換えると、旧約聖書の食物規定を守ることなどは、イエス・キリストの救いの成就でいらなくなったということです。パウロも言います、「なんでも食べなさい。『地とそこに満ちているものは、主のもの』だからです」(25c-26)、と。私たち信仰者は、まず、全てを神様に委ねて感謝して喜んで生きることができる自由を持てたのです！

④ 人の状況は全て異なり変化して行く。それを理解できる自由さ。

しかしそれで終わりではありません。自分の心配が終わったら、今度は他の人が同じ救いに入れることにパウロは思いを寄せています(31)。そこで大事なことは、自分の方が相手によって臨機応変に変われる自由さを持っているかです(33、9:19-23!)。人はそれぞれ状況が異なります。その状況もまた変化して行きます。そのような中で本当にその人の救いとなる助言を与えられるためには、キリストを思い、「本当の愛」を持って「信仰の知恵」を巡らすことが大事になってきます(11:1)。でないと、逆に惑わすことになりかねません(32)。相手のことを相手の立場になって考えられる自由さ、これもまた大事なキリスト者が持つべき自由さです。十字架の主を見上げ、これにも取り組んで行きましょう！